



被災地における災害の語りと科学知：  
島原半島ジオパークにおけるガイドや語り部の動向

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪公立大学大学院文学研究科 公開日: 2024-06-26 キーワード (Ja): ジオストーリー, 知識創造, 翻訳, ナラティブ, ジオパークガイド, 島原半島 キーワード (En): geostory, knowledge creation, translation, narrative, geopark guide, Shimabara Peninsula 作成者: 松木, 駿也 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/0002001002">https://doi.org/10.24729/0002001002</a>

# 被災地における災害の語りと科学知 —島原半島ジオパークにおけるガイドや語り部の動向—

松 木 駿 也

本稿は、島原半島ユネスコ世界ジオパークを事例に、被災経験の語りと地球科学的現象の説明との融合や交錯を議論するものである。雲仙普賢岳の噴火災害被災地では、災害遺構や雲仙岳災害記念館などの火山災害学習体験施設が整備され、そこで被災経験を語る多くのガイドや語り部が活動している。ジオパークの活動の中で、ガイドや語り部は、ガイド養成講座のような外部提供の場で地球科学的知識を得るだけでなく、自主的な学習も積極的に行っている。個人の経験や信念に基づいて学習・活動することで独自の災害観を形成してきたガイドや語り部は、被災者としての主観的視点と科学的かつ客観的な視点の両方を持つ「翻訳者」としての「語り」を実践している。それゆえ、語りは多様性・複数性を持つ。翻訳的な語りを展開されることで、聞き手は災害についての科学的理解に留まらず、多様な現実や規範、教訓を学ぶことが可能になる。こうした実践を通じて、被災経験は個人レベルの語りを脱し、防災・減災に活かすことのできる「文化資源」になりうる。

キーワード：ジオストーリー、知識創造、翻訳、ナラティブ、ジオパークガイド、島原半島

## I はじめに

「災害」の定義として、ハザード (hazard) は地震や豪雨など、被害をもたらす原因となる物理現象を指し、そうしたハザードによって人間社会が受ける被害をディザスター (disaster) とすることが多い [Wisner et al. 2004]。地理学における災害研究では、20 世紀後半まで自然科学的な分析が中心であったが、Oliver-Smith [2002] による議論を契機に、人文・社会的な側面が重視されるようになった。日本においては阪神淡路大震災以来、人文社会科学分野からの参入が顕著になった。近年は、頻発する大規模災害に対してハード面だけの対応には限界があるとして、災害の文化的側面についての研究も注目されつつある。たとえば Shannon et al. [2011] は、度重なる災害を経験したコミュニティは被災経験を「文化資源」として蓄積し、それを防災・減災に効果的に活かすことができると示唆している。このようなコミュニティの持つ伝統知や在来知を評価しようとする研究もある [Gaillard and Mercer 2013]。伝統知や在来知は、単なる知識や知恵、技術のみならず、価値や規範、信仰・信念なども含め、当該のコミュニティで共有されている災害観や自然認識全体に関わるものともいえる [祖田 2015]。また、いくつかの被災地では、被災経験そのものを伝える語り部の活動が展開されている。こうした、在来知や「語り」の文化と「科学知」をつなげることの重要性も指摘されて

いる〔Gamble et al. 2010、祖田・目代 2013〕。本稿で焦点を当てるジオパークの取り組みに対しても、在来知・伝統知といった文化資源と地形学・地質学などの科学知の関係を再評価する必要があるとの指摘がある〔鬼頭 2016〕。

本研究では、被災という disaster の語りと地球科学的現象である hazard の説明との融合や交錯に注目する。その題材として、1990 年から 1995 年にかけての雲仙普賢岳噴火災害（以下、平成噴火・平成噴火災害）の被災地でもある島原半島ユネスコ世界ジオパーク（以下、島原半島ジオパーク）を取り上げる。

ジオパークとは、地球科学的意義のある遺産（ジオサイト）や景観を保護し、それを教育やツーリズムなどに活用して地域の持続可能な開発を目指そうとする場である<sup>1)</sup>。ジオパークでは、地球科学的なサイトだけでなく、それに関連する動植物の生態系、歴史的・文化的サイトを含めて、地質・地形、植生、人間の作用などの相互関係を総合的にとらえる地生態学（geocology）の立場に立つことが重要になる〔横山編 2014, p 30〕。したがって、自然災害（hazard および disaster）もジオパークで扱う重要なテーマの一つであり（たとえば、鈴木〔2014〕、Nishitani et al.〔2021〕など）、島原半島をはじめ、過去の災害を主要なテーマと位置づけ、その痕跡をジオサイトとして整備しているジオパークが数多く存在する。また、ジオパークでは、地球科学的知識をわかりやすく訪問者や学習者に伝える工夫として、「ジオストーリー」が構築されている。ジオストーリーとは、ジオサイトの地球科学的説明に、関連する地域の歴史や文化、生態系などを有機的に関連づけて比較的平易な言葉で説明するものである〔菊地・有馬 2011、大野 2011a〕。ただ、柚洞ほか〔2014〕は、地域の地形・地質、生態系、歴史・文化という全く質の異なるものの関係性を直線的因果律によって説明してしまうと単純な環境決定論に陥る可能性があり、ジオストーリーの構築には、これらの関係性を地域住民の認識ベースに配列しなおし、地域の構造をシステムとして理解して言語化する必要があるとしている。

こうした地球科学的な価値や関連性は、単に現地を訪れてジオサイトを観察したり、案内看板を読んだりするだけでは、その価値を深く正確に理解することは難しく、ガイドによる解釈や解説（インタープリテーション）が重要になる〔フंक 2008、小泉 2011〕。そのため、各地のジオパークでジオパークガイドが養成されてきた〔江越ほか 2009、玉脇 2017〕。ジオパークガイドは、専門用語をできるだけ排除したジオストーリーを用いて、科学的な正確性を保証しつつもわかりやすく解説する必要に迫られている〔澤田ほか 2011〕。ここで重要なのは、解説者であるジオパークガイドは、ある程度の専門知識を学習している必要があるということである。ガイドの学習に着目した「知識創造」〔フंक 2008〕の観点から人材育成について議論した研究は散見されるが〔磯野 2015、坂口 2023〕、一方で学術的で専門的な知識はさほど重視されない場合があることも指摘されている〔菊地ほか 2022〕。すなわち、ジオパークガイドは、学習した地球科学的知識を解釈しなおし再構築するなど、利用客の興味を引いてわかりや

すく伝える工夫をしている可能性がある。

そこで、本稿では、ジオパークガイドらによる地球科学的知識の習得が、被災経験を語る解説活動にどのような影響を与えているかを明らかにする。それによって、学習によりどのような災害観が形成されてきたか、地球科学的な解説と被災者としての語りとが結びついた説明はどのような構造をしているか、そして、その語りは Shannon et al. [2011] のいう「文化資源」となりうるのかを、議論する。議論の材料とするのは、筆者が 2013 年 6 月から 2015 年 1 月にかけて複数回にわたり実施した聞き取り調査の結果や、その際に収集したジオパークや各ガイド・語り部組織などに関する諸資料（公的文書や計画など）、2014 年 12 月に実施したアンケート調査の結果である。また、2023 年 6 月には一部のジオパーク関係者やガイドに追加の聞き取り調査を実施している<sup>2)</sup>。以下では、II 章で平成噴火災害の特徴を述べ、科学とともに被災経験を語る場や制度としての災害学習施設の整備やジオパーク活動の展開について整理する。III 章では、被災経験を語るガイドや語り部について、学習に注目しつつその特徴を明らかにする。IV 章では、そうした場・制度におけるガイドや語り部の実際の語りの内容を検討し、V 章において、被災経験の語りと科学知の解説との融合や交錯について議論する。

## II 平成噴火災害の概要とジオパーク活動の展開

### 1. 平成噴火災害の特徴と整備された災害学習施設

長崎県島原半島（図 1）は、長崎県南東部に位置する半島で、島原市、南島原市、雲仙市の 3 市からなる。基幹産業は農業と観光であり、半島内には小浜、雲仙、島原の温泉地が存在する〔長崎県島原振興局 2022〕。

半島中央にそびえる雲仙火山は 50 万年前から活動を始め、有史後は 3 回噴火している。1990 年 11 月 17 日、普賢岳は 198 年ぶりに噴火を始めた。当時、山頂から登る 2 本の噴煙を見て、「新たな観光名所が増える」と地域住民、特に観光業の人々は喜んだという<sup>3)</sup>。この噴火の特徴は、火砕流と土石流である。1991 年 5 月 20 日に始まった溶岩噴出により形成された溶岩ドームの一部が崩落し、火砕流となって半島東部の島原市、深江町（現・南島原市深江町）方向へ流れ下り、44 名の死者・行方不明者を出すなど大惨事となった。そのうち 43 名は、1991 年 6 月 3 日の火砕流によって避難勧告が発令されていた地区内で犠牲となった報道関係者、タクシー運転手、消防団員などであった（杉本・長井 2009）。また、噴火により降り積もった火山灰は、豪雨時に土石流を誘発し、水無川流域で多くの建物や農地の被害をもたらした〔太田 1996〕。こうした火砕流や土石流によって半島東部の国道や鉄道が寸断されるなど、地域社会インフラにも大きな被害を出した。地域住民は長期にわたる避難生活を余儀なくされ、人口の流出も続いた。観光客数は半島全体で減少し、観光業をはじめとする産業は大打撃を受けた〔長崎県雲仙岳災害復興室がまだす計画推進班 1997〕。そこで 1997 年に、島原半島全体の再生と活性化



図1 島原半島位置

を目指す「島原地域再生行動計画（通称：がまだす計画）」<sup>4)</sup>が策定され、これにより、災害遺構や雲仙岳災害記念館などの施設が整備された〔島原地域再生行動計画策定委員会 1997〕。

災害遺構としては、「旧大野木場小学校被災校舎」と「土石流被災家屋保存公園」の2カ所が一般に公開されている<sup>5)</sup>。旧大野木場小学校被災校舎は、1991年9月15日の火砕流により焼失した旧深江町立大野木場小学校の校舎である（1999年公開）。2002年には、隣接して国土交通省の砂防工事監視施設及び案内施設である大野木場砂防みらい館も開設され、火山・砂防学習拠点の一つとなっている。土石流被災家屋保存公園には、水無川で発生した土石流で埋没した家屋11棟が保存・展示されている<sup>6)</sup>。これらは隣接する道の駅と共に1999年にオープンすると、年間約45万人（2011年）の入場者<sup>7)</sup>を得る、半島内観光の拠点施設となった。

雲仙岳災害記念館（以下、災害記念館）は、がまだす計画の重点プログラムの1つとして2002年に開業した。火山を扱う博物館としては全国有数の規模を誇る。映像シアターや火砕流被災地のジオラマなどが展示され、平成噴火の実態とその脅威、また復興の姿や火山がもたらす恵みについて学ぶことができる。

以上のように、災害遺構や災害記念館といった火山災害学習体験施設<sup>8)</sup>は、観光客や地域内外の子どもたちの学習の場であり、次章で述べるガイドや語り部の活動を通じて災害の伝承と教訓を伝える役割を果たす場となっている。

## 2. 島原半島におけるジオパーク活動の展開

2007年に島原市で開催された火山都市国際会議が、多くの市民、ボランティアの協力を得

て成功したことで、島原市役所の担当者らの中で自信が生まれ、この盛り上がりを一過性のものにしないために次なる目標としてジオパーク認定が掲げられた〔杉本 2012〕。2008年、島原市を中心として南島原市、雲仙市及び長崎県、地元商工・観光団体、観光ガイド団体などにより構成される島原半島ジオパーク推進連絡協議会<sup>9)</sup>（以下、協議会）が発足し、事務局には3市の職員が出向した。そして、2008年に日本ジオパークネットワーク（JGN）に加盟し、2009年には日本初の世界ジオパークネットワーク（GGN）への加盟が認定される。

島原半島ジオパークの主要な構成要素は、やはり、平成新山や災害遺構などの平成噴火災害関係のジオサイトである。世界ジオパークネットワーク加盟申請書〔島原半島ジオパーク推進連絡協議会 2009〕の「科学上の記載」の章では、14ページ中6ページが平成噴火関係に割かれ、科学的に重要なジオサイトは23個のうち9個が平成噴火関係（平成噴火後の砂防施設を含む）である（表1）。さらに、2012年に島原半島ジオパークで開催された第5回ジオパーク国際ユネスコ会議における巡検も、4コース中2コースが平成噴火災害関係をめぐる行程であった〔第5回ジオパーク国際ユネスコ会議 2012〕。このように平成噴火災害に関係するサイト、とりわけ災害記念館と災害遺構は島原半島ジオパークの運営上、重要な位置にある。協議会事務局への聞き取りによると、GGN加盟審査の際に、災害記念館は「間違いなく世界レベルの施設であり、このジオパークの目玉である」と評価され、「災害遺構の存在はプラス評価になる」と審査員が述べていたとのことである。

ところが、2012年の日本ジオパーク委員会（JGC）による日本ジオパーク再審査<sup>10)</sup>において、「人の暮らしにかかわるサイトなど噴火遺構以外のジオサイトの活用が課題である」と指摘された<sup>11)</sup>。これについて、2013年に協議会事務局の職員に聞き取りを行ったところ、「島原半島ジオパークは火山災害というテーマに特化しても良いと思っている」と、JGCの指摘に反する見解を持っていた。この職員は「島原半島ジオパークでは平成新山や災害遺構、復興した街を見どころとしてアピールしたい」と述べていたが、噴火による生活の変化はジオサイトとして選定するのは難しく、そうした社会的側面を伝えるには、災害記念館や災害遺構でのジオパークガイドの語りが重要な要素となる。

ジオパークにおいて災害を扱うことについて、JGCの委員でもあった中田〔2013〕は、「大きな自然災害を体験したからといって、その地形的証拠や遺構を中心に据え、その体験談や復興過程を展開していく活動のやり方は、ジオパークとして好ましいものとは言いがたい。ジオパークは自然に触れながら自然の偉大さや仕組みを学び、その一過程として、自然の脅威と災害を理解することが望ましい」と述べている。あくまでジオパークにおいて災害は地球科学的な現象として取り扱うものだということが示唆される。そのため、島原半島ジオパークにおいても、協議会に専門員として火山学の博士号取得者が採用されていたり、地学を専門とする県立高校の理科教諭が出向してきたりしている。また、島原市にある九州大学地震火山観測研究センターの地球科学者を講師に招いた講演会や登山会が開催されるなど、島原半島ジオパーク

表1 島原半島ジオパークの主要ジオサイト

テーマ	主要23ジオサイト	主なジオポイント (抜粋)	
平成 噴火	平成新山	平成新山溶岩ドーム	
	仁田峠からドーム および被災地遠望	仁田峠ロープウェイ 仁田峠第二展望所	
	上木場被災遺構 (1991年6月被災)	1991年6月火砕流堆積物 「定点」 北上木場農業研修所跡	
	大野木場被災遺構 (1991年9月被災)	旧大野木場小学校被災校舎 再生したイチョウの木	
	千本木被災遺構 (1993年6月被災)	南千本木火砕流露頭 鉄板が巻き付いたタブの木 千本木の被災住宅跡	
	水無川流域の 土石流被災地	土石流被災家屋保存公園 安中三角地帯の嵩上げ事業 道の駅みずなし本陣ふかえ	
	垂木台地の自然回復	平成新山ネイチャーセンター	
	平成噴火資料	雲仙岳災害記念館 自衛隊装甲車・ヘリコプター	
	災害 の 予防	水無川水系の 防災工事	大野木場砂防みらい館 水無川スリットダム 水無川砂防ダム 水無川導流堤
		焼山の溶岩流	新焼溶岩 (1792年)
島原 大変	眉山山体崩落	眉山天狗山の山体崩落地 流れ山 (九十九島) 秩父が浦の流れ山露頭	
	島原城下の資料	松平文庫 (島原図書館) 島原城観光復興記念館	
	先雲仙火山岩類	早崎玄武岩 岩戸山水中火砕岩 国崎安山岩	
先史 時代	先雲仙堆積岩類	龍石琴平山 両子岩 (口之津層群)	
	化石	加津佐公民館の化石展示 田平の化石帯	
	阿蘇火砕流堆積物	原城跡のAso-4軽石流堆積物 国見のAso-4軽石流堆積物	
	千々石断層地形	千々石断層 愛野展望台 千々石展望台	
	雲仙地溝断層群	布津断層・深江断層・高岩山断層 柳原断層・大苑断層	
	雲仙温泉	雲仙お山の情報館 雲仙地獄	
自然 の 恵み	島原温泉	ゆとろぎの湯 サイダー泉	
	堆積岩源温泉	原城温泉 須川温泉	
	豊かな水の恵み	鮎掃りの滝 神代川のオキチモズク 白雲の池 水力発電所 有馬湧水ホテルの里 内野湧水	
		植物	池の原ミヤマキリシマ群落 野岳イヌツゲ群落 地獄地帯シロドウダン群落 普賢岳紅葉樹林

島原半島ジオパーク推進連絡協議会 [2009] により作成

になったことで、彼らのような専門家との関わりを含め地球科学的なアプローチにより災害を学ぶ環境が整いつつあり、科学的な視点から災害を語る制度ができたことになる。

### Ⅲ ガイドや語り部による地球科学的知識の学習

Ⅱ章では、被災経験を科学知とともに語る「制度」としてのジオパークが展開されたことについて述べた。本章では、そうしたなかで被災経験を語るガイド・語り部が、何をどのように学習しているかを検討する。なお、以下の内容は、2013～2015年に実施したガイドや語り部のほか、その管轄諸団体への聞き取りに基づく。

#### 1. 災害を語るガイド・語り部組織の展開

平成噴火の被災地周辺（おもに雲仙普賢岳東麓の島原市と旧深江町）で活動するガイドや語り部組織は3つあり、また、被災地以外に拠点を置くいくつかの観光ガイド組織が存在する。ここではジオパークガイド登場以前から活動していたガイド・語り部組織を簡単に説明しておこう。

##### (1) 雲仙岳災害記念館 語り部ボランティア

2002年の災害記念館開業の際に、語り部、英語（外国語）、教育、環境整備の各分野のボランティアが募集された。このうち、語り部ボランティアが活動の一環として災害記念館や地域内の学校で講話活動を行っている。

##### (2) 島原観光ボランティアガイド

2003年に島原市が設立した島原観光ボランティアガイド（以下、島原観光ガイド）は、災害学習体験施設だけでなく、島原城や武家屋敷を巡る観光コースも案内している。2003年と2004年に郷土史家を講師に迎えた養成講座が開催され、それ以降はその養成講座の資料などを用いて自主的に学習したり、他のガイドの案内を見学したりしながら知識や技術<sup>12)</sup>を身につけてきた。

##### (3) 島原半島観光連盟（がまだすネットから改称）

2004年に島原半島で長崎県の主導によって設立されたNPO法人がまだすネット（現在は、島原半島観光連盟（以下、観光連盟）に組織改編）は、グリーンツーリズムを中心に100のプログラムを提供しており、この中に「火山学習プログラム」があり、これはガイドの案内で災害遺構などを巡るプログラムである。この案内を行っていたのが島原観光ガイドに重複して所属するガイドらだった。このガイドらは、もともと観光業に従事していたり、小学校教員だったりしたため、ガイド技術が高く、活動が積極的だった。2008年にジオパーク活動が開始してからこの火山学習プログラムは継続していた<sup>13)</sup>。

##### (4) 被災地域以外の観光ガイド

南島原市には、旧町5地域に観光ガイド組織<sup>14)</sup>が存在していたが、旧南有馬町にある原城

跡が世界遺産登録される見通しとなり観光客増加が予想されていた 2014 年に、南島原ひまわり観光協会によって有馬の郷に統合された。雲仙市小浜町の小浜温泉ではおぼま温泉観光ガイドが活動している。ここまで説明してきたガイドや語り部はボランティア的に活動する組織であるが、雲仙温泉で活躍する雲仙ガイドさるふぁの 1 名はガイド活動を生業としている。

以上のようなガイド・語り部らは、おもにボランティア的な活動を通じて、災害に関する知識や経験、歴史や文化に関する知識、また案内技術などをガイド間で共有していた。

## 2. ジオパークガイドの組織化と自主学習組織の登場

本節では、島原半島ジオパークにおけるジオパークガイドの育成に焦点を当てる。2008 年、協議会は半島内の希望者を対象にジオパークガイド養成講座を開講した。講師には専門員のほか、郷土史家や雲仙ガイドさるふぁの代表、植物、救急関係など、各分野の専門家を迎えた〔江越ほか 2009〕。しかし、受講者に対し、ジオパークガイドとしての活動意思の見極めをせず、組織化しなかったことから、ガイド養成は事実上失敗した〔大野 2011b〕。

このような状況の中で、受講者の一部有志が独自に「ジオパークボランティアガイド」を結成した。このガイドらは莫大な災害支援を受けた経験から「恩返し」「感謝」の意識が強く、無償で案内したいという強い信念があった。しかし、このアプローチは地域振興を標榜するジオパークの理念に合致せず、保険によるリスク管理などの問題もあり、協議会事務局の支援を受けることができずに立ち消えとなった。

また、受講者のなかには、回数や内容に不十分さを感じる者もいた。そのうち、有志の 10 名ほどで自主学習会が結成された。この自主学習会では、火山学、火砕流を専門とする災害記念館の学芸員（博士号取得）を顧問に迎え、月に一度、半島内外で地層巡検を行うなど精力的な学習活動が見られる〔長井ほか 2010〕。この会の主催者はいずれのガイド組織にも所属していないが、半島内で特徴的な露頭を自ら見つけては学芸員や他の参加者（後述の認定ジオガイド 3 名程を含む）とともに観察に訪れる。この主催者は、学芸員が地層を読み取って解説してくれる様子が面白いと感じている。自主学習会が見つけた地層をもとに学芸員が研究成果を発表しており〔長井ほか 2022、東山ほか 2022〕、その積極的な学習は学術的成果にも貢献している<sup>15)</sup>。

ジオパークガイド制度を確立できなかった協議会事務局<sup>16)</sup>では、2013 年の世界ジオパーク再審査直前となる 2012 年 12 月に、ジオパークガイドとして活動する意向のある者に対して、知識や技術を問う面接・模擬ガイドによる認定試験を行い、この試験に合格した 27 名をジオパーク認定ガイド（以下、認定ジオガイド）とした。

この認定試験の合格者の中には、自身の学習内容やガイド技術に自信がないという者もあり、自分のガイドが予定されている前に下見をしたり、協議会事務局で学術専門員や職員に質問したり、彼らを相手に練習したりしているとのことである。また、認定ジオガイドを対象とした

協議会事務局主催のスキルアップ研修も定期的実施されている。

### 3. ガイドや語り部の特性

本節では、島原半島内のガイド・語り部組織で活動する人々の特徴を明らかにするため、本章1節及び2節で説明したガイド・語り部を対象に2014年12月に実施したアンケート調査の結果を取り上げる。アンケート調査票は各組織の事務局や代表者から個人へ配布してもらい、54名から回答を得た。回答者54名の所属組織は、表2の通りである。複数の組織に重複して所属する者も多く、認定ジオガイド19名のうち11名が他の組織でも活動していた(表3)。なお、自主学習会はガイド組織ではないため所属先としては含んでいない。

表2 各ガイド・語り部組織の所属者数

組織名	所属者数
認定ジオガイド	19
語り部ボランティア	5
島原観光ボランティアガイド	9
島原半島観光連盟 (がまだすネット)	4
有馬の郷	29
おばま温泉観光ガイド	7
その他 (雲仙ガイドさるふあなど)	3
計	54

アンケート調査結果をもとに作成

表3 ガイド・語り部の重複所属状況

所属数	人数 (うちジオガイド)[ジオガイド以外に所属する組織]人数
1 組織	41 (8)
2 組織	7 (5) [島原観光]1, [有馬の郷]3, [おばま]1
3 組織	3 (3) [語り部・島原観光]1、[語り部・その他]1、 [島原観光・連盟連盟]1
4 組織	3 (3) [語り部・島原観光・観光連盟]3
計	54 (19)

アンケート結果をもとに作成

アンケートでは「ガイド内容の勉強方法」、「ガイド技術の習得方法」、「ガイド養成講座や学習会へ参加した理由」、「ガイドになった動機」、「ガイドするときに重視していること」について質問した(複数選択可)。これらの質問への有効回答は50名だった。以下では、各選択肢への回答者の割合を認定ジオガイドとそれ以外のガイドで比較している(表4)。2013年11~12月に実施したガイドや語り部個人への聞き取り調査(表5)の結果も用いながら、ガイドや語り部の学習や災害への意識を分析する。

表4 認定ジオガイドとそれ以外のガイドの比較

質問	項目	回答者割合		
		全体 (n=50)	認定ジオガイド (n=19)	ジオガイド以外 (n=31)
ガイド内容の 勉強方法	養成講座や学習会	84.0%	94.7%	77.4%
	所属団体の学習会	84.0%	78.9%	87.1%
	専門家から個人的に	18.0%	21.1%	16.1%
	インターネット	24.0%	36.8%	16.1%
	博物館や図書館など	40.0%	57.9%	29.0%
	現地での観察	76.0%	84.2%	71.0%
	特になし	0.0%	0.0%	0.0%
	その他	14.0%	26.3%	6.5%
ガイド技術の 習得方法	ガイド養成講座	62.0%	73.7%	54.8%
	所属団体の学習会や研修	80.0%	73.7%	83.9%
	専門家から個人的に	12.0%	5.3%	16.1%
	インターネットで情報収集	6.0%	10.5%	3.2%
	博物館や図書館など	10.0%	10.5%	9.7%
	実際に観光客相手にやる	56.0%	57.9%	54.8%
	特になし	4.0%	5.3%	3.2%
	その他	12.0%	26.3%	3.2%
養成講座や 学習会への 参加理由	知識を身につける・学習意欲	68.0%	78.9%	61.3%
	時間があった	16.0%	21.1%	12.9%
	歴史・文化が好き	54.0%	47.4%	58.1%
	自然（ジオ含む）が好き	30.0%	52.6%	16.1%
	災害を経験した	8.0%	15.8%	3.2%
	誘われた	24.0%	5.3%	35.5%
	参加したことがない	2.0%	0.0%	3.2%
	その他	16.0%	15.8%	16.1%
ガイドに なった 動機	収入	6.0%	10.5%	3.2%
	やりがい	26.0%	42.1%	16.1%
	観光客との交流	48.0%	36.8%	54.8%
	社会・地域貢献	62.0%	47.4%	71.0%
	災害・被災経験を伝える	12.0%	26.3%	3.2%
	地域の魅力を伝える	74.0%	73.7%	74.2%
	その他	16.0%	15.8%	16.1%
ガイドを するとき 重視すること	専門知識の豊富さ	22.4%	27.8%	19.4%
	ガイド内容の正確さ	28.0%	36.8%	22.6%
	ガイド内容のわかりやすさ	82.0%	84.2%	80.6%
	ガイド案内技術	22.0%	10.5%	29.0%
	利用者の安全確保	48.0%	57.9%	41.9%
	利用者とのコミュニケーション	70.0%	73.7%	67.7%
	島原らしさ（方言など）	24.0%	21.1%	25.8%
その他	12.0%	15.8%	9.7%	

アンケート調査結果をもとに作成

表5 聞き取り調査を実施したガイド・語り部

番号	所属組織*	性別	年齢* (年代)	災害当時の 居住地	調査当時の 居住地*	過去の職業**
A	認定ジオガイド 語り部ボランティア	男性	70代	島原市	島原市	教育・福祉系
B	認定ジオガイド 語り部ボランティア 島原観光ガイド	男性	70代	島原市	島原市	観光・交通系
C	認定ジオガイド 語り部ボランティア	女性	60代	島原市	島原市	教育・福祉系
D	認定ジオガイド	女性	50代	西有家町 (現南島原市)	南島原市 深江	その他***
E	語り部ボランティア 島原観光ガイド 観光連盟	男性	60代	島原市	島原市	観光・交通系
F	認定ジオガイド 語り部ボランティア 島原観光ガイド 観光連盟	女性	60代	島原市	島原市	教育・福祉系
G	島原観光ガイド	男性	70代	埼玉県	島原市	その他
H	認定ジオガイド 語り部ボランティア 島原観光ガイド 観光連盟	女性	60代	島原市	島原市	観光・交通系
I	認定ジオガイド 島原観光ガイド 観光連盟	女性	60代	島原市	島原市	観光・交通系

\* 所属組織, 年齢 (年代), 調査当時の居住地は 2013 年の調査時点。

\*\* 「教育・福祉系」は教員や保育士、「観光・交通系」は旅館勤務やバスガイドなどである。

\*\*\* D 氏には 2023 年 6 月に追加調査を実施。2023 年当時の年齢 (年代) は 60 代で、現役で働いている。  
2013 年 11~12 月の聞き取り調査により作成

ガイド内容の勉強方法については、ほとんどのガイドが養成講座や学習会、所属組織の学習会で学んでいる。一方で、認定ジオガイドとその他のガイドを比較すると、認定ジオガイドの方がインターネットや博物館・図書館、現地観察などで自主的に学習している。ガイド技術の習得方法についても、認定ジオガイドになるには養成講座を受講していることが条件だったため認定ジオガイドの方が参加率は高い。養成講座や学習会へ参加した理由を比較すると、認定ジオガイドの方が知識を身に付けたい、学習したいという意欲が高く、ジオ<sup>17)</sup>を含む自然だけでなく歴史などへの興味関心も高い。このような意識や興味から、認定ジオガイドの方が、より積極的に学習している傾向にある。この背景には、他の人から誘われて養成講座や学習会に参加した者は少ないことからわかるように、認定ジオガイドらの学習に対する主体性の高さが伺える。聞き取り調査では、学習の動機として「地元のことを知りたい」(A 氏、B 氏など多数) という声が聞かれ、実際に学習をしていく中で、「当たり前だと思っていたことがそうではなかった (地球科学的に貴重だと) とわかった」(C 氏)、「地元において地元のことを知ら

ないから、自分も勉強しないといけないと思った」(D氏)と、自分の住んでいる地域の成り立ちを学習する必要性、またその楽しさを感じている。B氏は、中国人留学生を相手にガイドした際に熱心に質問されたことを経験し、「ジオパークガイドはもっと勉強しないといけない」と強く感じており、地球科学の基本的な知識だけでなく、「現地で説明するためにはどういう知識が必要なのか、どういう勉強をした方がいいのか、それぞれのガイドが考えなければならぬ」と述べていた。ジオパーク認定という機会によって、ガイドらが学習の必要性を認識するようになったといえる。また、ガイドをする際には、専門知識の豊富さよりも、正確さやわかりやすさを重視している。一方で、ジオパークに必要な地球科学的知識は難しく、ある認定ジオガイドは「これまでのままでよかった」と語り、認定ジオガイドではないあるガイドは「火山関係のガイドはできればしたくない」と感じている。

災害についてみると、認定ジオガイドの方が災害経験をきっかけに養成講座や学習会に参加している者が多く、災害や被災経験を伝えるためにガイドになった者が多い。火砕流で教え子をなくした元教員のA氏や元保育士のC氏、同じ地区の仲間を亡くしたE氏などは、噴火災害の経験を伝えていかなければならないという強い使命感を持つ。そう述べる者の多くが、災害時の全国からの義援金や救済物資などへの「感謝」を動機としてあげる。たとえばE氏は、「(E氏が)島原市長にボランティアガイドを作ってくれと言った」のだと話してくれた。「全国からいただいた支援への感謝を伝えるために、島原に多くの観光客に来てもらい、復興した街を見てもらい」という思いだという。また、利用者の安全確保を重視する者が多いのも認定ジオガイドならではの特徴だろう。

本章では、ジオパークガイドを含むガイド・語り部組織の成立過程と、ガイド個人へのアンケート結果を示した。この結果からは、ガイドらは、自身の興味や動機によって所属する組織を選んでいること、(特に認定ジオガイドは)所属組織で提供される学習機会だけでなく様々な自主的学習をしていることがわかった。

#### IV 島原半島における被災経験の語り

本章では、ガイドや語り部が被災経験に関してどのような語りを行っているのかを明らかにする。1節及び2節では、島原半島ジオパーク認定ジオガイドのガイドマニュアルと雲仙岳災害記念館における語り部ボランティアの語りの内容について、制度や場面によって語る内容に制限や変化はあるのか検討する。3節では、おもに災害遺構におけるガイドや語り部の「語り」の内容について具体例を示しながら検討する。なお本章は、ガイドや語り部、協議会への聞き取り調査に基づいている。

##### 1. 島原半島ジオパークにおけるガイドマニュアルの作成

島原半島ジオパークのジオサイトにおいて認定ジオガイドが話すべきとされる内容は、2013～2015年の調査当時は特に定められておらず、認定ジオガイドは自分自身で学習した地球科学的知識をもとに、自ら解説内容を構成して案内していた。そのため、自身の学習に自信のないというガイドの中には、ジオパーク専門員に個別に教えてもらったり、案内場所の下見に行ったりするなど、念入りに事前準備する者がいた。

2023年6月に協議会へ追加の聞き取りを行ったところ、2018年以降、案内頻度の高いジオサイトについてはガイドマニュアルを作成しているという<sup>18)</sup>。このガイドマニュアルは、協議会事務局監修のもと、認定ジオガイドらの自身の手によって作成され<sup>19)</sup>、地球科学的な情報を効果的に伝えるガイドラインとして使用されている。例えば、表6は、地域の小学校を対象とした「ジオ学習」で、旧大野木場小学校被災校舎を案内するガイドマニュアルを一部抜粋したものであり、「最低限これだけは伝える」内容とのことである。これをみると、火砕流と火砕サージ<sup>20)</sup>の科学的な説明が中心であり、それ以外には「③ 生徒は一人も被災しなかったこと」という人的被害がなかったことを強調する項目が1つあるのみである。この③では、教訓ともいえる「避難の重要性」を述べるかどうかはマニュアル内では示されていない。つまり、この場所で学ぶことのできる、災害に関する社会的側面や教訓についての語りは、個々のガイドの裁量に委ねられている。認定ジオガイドは科学的情報の提供に重点を置きつつ、災害について自身の経験や考えを交えて語るができるものの、どの程度踏み込むかは個々の判断に託されている。

表6 旧大野木場小学校ガイドマニュアルの一部抜粋

(何を伝えるか)	
①	小学校と平成新山の位置関係
②	火砕流と火砕サージ*の進行方向
③	生徒は1人も被災しなかったこと
④	火砕サージは高温であること
⑤	ネイチャーセンター**で書いた火砕流地層の図面の発生年月日とこの学校を襲った火砕サージは同じものだったこと

\* 協議会事務局で閲覧したガイドマニュアルでは「火災サージ」と誤植されていたものを筆者修正。④と⑤についても同様。

\*\* ネイチャーセンターとは、2003年に開業した「平成新山ネイチャーセンター」のことで、平成噴火で荒廃した垂木台地の植生復元の様子や、火砕流堆積地層の断面を観察することができる。

(2023年6月に島原半島ジオパーク協議会事務局で閲覧したガイドマニュアル「小学校のジオ学習」により筆者作成。注は筆者)

## 2. 雲仙岳災害記念館における語り部ボランティアの語り

次に、島原半島ジオパークの拠点施設でもある災害記念館の展示とそこで語り部によって語

られる内容について検討する。

雲仙岳災害記念館は、先述のように「間違いなく世界レベルの施設」と言及されていることから、火山・噴火に関する地球科学的展示が充実した施設である。一方で、井出〔2010〕は、自然科学的な展示が中心に据えられ、被災による社会の変化のような社会科学的な展示や、死者の鎮魂という視点からの展示は少ないと批判的である。このような施設において、語り部は、災害記念館の展示内容を補完し、被災者や関係者の視点から災害の経過や経験を伝える役割を担えるはずである。そこで、2013年12月の調査当時に筆者が災害記念館で聞いた語り部ボランティアの講話の内容からそうした役割が担われているのか検討する。

当時、毎週日曜日に館内で行われていた語り部ボランティアによる講話コーナーにおいて、F氏は、当時の写真をスクリーンに映しながら、避難生活など、噴火によって生活が一変してしまったことを中心に話をしていた。一方、A氏は、館内セミナー室にて県外からの修学旅行の高校生を相手に、平成新山の噴出物など半島内でみられる石の実物を示しながら、平成噴火の仕組みについて伝えようとしていた。そして最後には、全国から大きな支援を受けたことへの感謝を伝えた。

F氏とA氏の語る内容には、その内容や構成、伝えたいことに大きな違いがある。災害記念館の学芸員への聞き取り（2013年12月及び2023年6月）によると、語り部ボランティアの話す内容については「おまかせ」であり、話すうえで必要となる写真などの資料は共通で提供しているものの、「語り部それぞれが伝えたいと思っていることをしゃべってもらえばいい」としている。語り部ボランティアの話は、彼ら／彼女らの当時の経験や感情に基づいており、被災者としての視点に立った話だけでなく、学習を重視する話など、多様な語り口で展開されている。

### 3. 災害遺構においてガイドや語り部は科学的知識とともに何を語っているのか

ここまで、ジオパーク活動が展開される中で作成されたガイドマニュアルは、地球科学的知識を効果的に伝えるものとして作成されたものの、認定ジオガイドの被災経験や感情などをどのように語るかは個人の判断であることと、災害記念館の語り部ボランティアの語りも「おまかせ」であることを述べてきた。この他のガイド組織においても、旧大野木場小学校被災校舎や土石流被災家屋保存公園における解説内容について、2013～2015年の調査当時はどの組織にもマニュアルなどはなかった。本節では、これらの災害遺構においてガイドや語り部がどのような語りを行っているか、先述の表5のガイドや語り部への聞き取り調査による具体的な事例から検討する。

多くのガイドが、火砕流や土石流の地球科学的な内容をわかりやすい表現で、身振り手振りを交えながら説明し、さらに災害当時の話をすることが一般的であるとのことであった。また、A氏やB氏は写真や岩石の実物などを積極的に活用している。そうした地球科学的説明に追

加してガイドや語り部が話す内容として、聞き取りの中でしばしば言及されたのは、学習や適切な行動を促す内容である。例えば、2000年代後半に島原市に移住してきたG氏は、島原観光ガイドに入って話をする機会ができたことで災害に対しての意識が変わり、「災害について勉強すべきとを感じるようになった」と修学旅行生などに伝えている。H氏は、小中学生を相手に「この災害では失われなくていいはずの命がたくさん奪われてしまった。命を大事にしてください。」という話をしてきた。

他にも、平成噴火災害当時の生活の変化や心情の揺らぎについて語る人もいる。例えば、認定ジオガイドの一人であるD氏に、旧大野木場小学校被災校舎と土石流被災家屋保存公園でどのような話をするのか聞いたところ、火砕流や土石流についての説明に加えて、表7のようなエピソードを話すことがあるという<sup>21)</sup>。これらの語りは、D氏が直接経験したり聞いたりした話であり、被災した人々のあときの苦しさや生活の困難さを如実に伝える。これらの語りはD氏の島原方言や抑揚、身振り手振りもあいまって、聞く者の心に深く届けられるだろう。噴火による火砕流・土石流という科学的現象と、それによって個人に引き起こされた被災経験・感情とが併せて語られる。

表7 D氏(2023年調査時は60代、女性)の災害遺構での科学的内容以外の語り

場所	旧大野木場小学校被災校舎	土石流被災家屋保存公園
語りの内容 (概要)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・D氏自身が被災校舎のある地区出身である。</li> <li>・近所に住んでいる後輩が被災当時はこの地区の消防団員だった。</li> <li>・彼が「立入禁止なので自分たちの家が燃えているのを見ているだけしかできなかったのが悔しかった」と言っていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・災害当時は30代で、子育てしながら仕事をしていた。</li> <li>・当時は、公園より南の有家町(現・南島原市)在住で、勤務先は北の島原市中心部だった。</li> <li>・毎朝40分で仕事に通えていたのが、水無川流域が立ち入り禁止区域に設定されたために、半島をぐるっとまわって2時間半かかるようになった。</li> </ul>

2023年6月の聞き取り調査により作成

ただし、そうした個人的経験や感情が、場合によって否定されることもある。2022年の世界ジオパーク再審査の際、D氏は土石流被災家屋保存公園の案内を担当した<sup>22)</sup>。平成噴火の際の土石流がどういう現象だったか説明を一通り終えたあと、インドネシアからの審査員に「噴火の時に地域の人は、『山が怒った』とか『祟りが起こった』とか、そういう話は出ましたか?」と聞かれたという。今の時代になぜそんなことを聞くのだろうと思ったが、「すいません、そういう話もあったのかもしれないけれど、私は毎日の生活に追われていてそれどころではなかったです。土石流のせいで国道が通れず、40分の通勤路が2時間半になった。子ども3人の子育てをしながらです。あなた(審査員。D氏と同年齢だった)も当時30代前半で、同じように毎日がたいへんな時期でしたよね」という旨の回答をした。すると、審査員から「孫は何人いますか」と聞かれ、どうしてそんなことを聞くのだろうと思いつつも、「〇人いま

す」と答えた。審査が終わったあと、同行していたジオパークガイドの会の会長には「Dさんが余計な話をした」「孫の数を自慢した」と叱責されてしまったという。しかし、通訳を担当していた協議会の職員から、その審査員が「現地の人の実体験を話してくれたのがよかった」と喜んでいと聞かされて「よかった」と思ったそうだ。

以上のように、ジオパークという制度、雲仙岳災害記念館や災害遺構という場においてガイドや語り部によって語られる被災経験の語りは、内容の違いに関わらず、地球科学的知識と併せて語られるという点では概ね共通する。本来であればほぼ同じ内容になっても不思議ではない地球科学的説明をしつつも、個性ある語りが生じるのは、そこに個人の経験・信念の差異や学習の履歴の差異が反映されるからだろう。次章ではこの点を議論する。

## V 地球科学的知識の学習は被災経験の語りにどう影響するのか

### 1. 学習により形成された島原半島の災害観

ガイドや語り部へ聞き取りの中で、「当時は火砕流というものを誰も知らなかった」という発言がしばしば聞かれた。つまり、地域の人々の中に、火砕流の危険性を正しく理解せず、危険な場所に立ち入ってしまい多大な犠牲が生じたという「反省」や「後悔」が存在する。こうした背景から災害記念館の展示に関しては、平成噴火、特に火砕流に関する科学的展示を充実させることが「選択」された〔高原ほか 2023〕。島原半島では、こうした地球学的知識を重視した施設整備やジオパーク活動が展開してきたことによって、継続的に学習機会が提供されてきた。さらに、こうした学習機会や自主的な学習にジオパーク専門員や災害記念館学芸員ら地球科学者が寄り添ってきたことで、ガイドや語り部の火砕流や火山についての科学的理解が向上した。その結果、ガイドや語り部は「学習や知識の重要性」や「避難の重要性」を（再）認識することとなった。さらに、利用客とのコミュニケーションの中でもこれらを（再）認識してきた。つまり、災害を経験したガイドや語り部らは、地球科学的知識をきちんと獲得すること、それをできる限りわかりやすく聞き手に伝えることこそが、災害に備える／災害を克服するうえで重要な意味を持つと考える人が多い。それはある意味で、島原半島における「災害観」を形成しているのではないか。

このように考えるガイドや語り部らは、専門員や学芸員との質疑応答や聞き手との相互作用の中で話す内容を変化させてきた。それは単に知識を吸収するというだけでなく、自分の被災経験や感情を交えた、聞き手に伝わりやすい知識の提供という形を取れるように工夫する過程である<sup>23)</sup>。それは、フンク〔2008〕がいうところの知識創造というものに値するであろう。このような、地球科学的知識について語るべき内容を常に再構築していくことがガイドや語り部が実践してきたことだと言える。

ただし、地球科学的知識というものが一枚岩とは限らない。やはりそれは被災経験や感情と

いうものによって語り方も人によって異なってくるからである。それは「語りの複数性」〔菅 2021〕という議論にも関係すると思われる。さらに、いわゆる科学の「素人」が自身の経験を交えながら地球科学的知識を伝達するには、さまざまな工夫が必要であり、ある種の技術も要求されるであろう。次節では、これを「翻訳」という観点から考察してみたい。

## 2. 科学を学んだガイドや語り部の語りは解説か？翻訳か？

このように、学習した知識に自らの経験を併せて語るガイドや語り部（特に、地球科学を学んだジオパークガイド）は災害について2つの視点から語っている。一つは、被災者（当事者）としての視点で、個々の経験を通じて災害の影響や生活の変化を主観的に表現するものである。例えば、自宅に立ち入れなくなったことや知り合いが亡くなり悔しかったこと、生活に困難さを感じていたことなど、被災地の住民としての実体験や感情を通して災害をとらえている。この視点は、噴火による日常の変化としての災害 disaster を主観的にとらえたものである。一方で、もう一つの視点として、地球科学的な側面から災害を語っている。ジオパークガイドらは、火山、噴火、火砕流といった地球科学的現象 hazard を学び、客観的な視点から災害を俯瞰して語ることになる。つまり、ジオパークガイドとして hazard の正しい理解を促す一方で、当時の被害の状況や生活や心情の変化 disaster も語る。ジオパークガイドは、この二つの視点の間を往復しながら語りを展開している。地球科学的な知識を提供するために客観的に科学を語りつつも、被災者としての視点で災害の影響や変化を語ることで、話に深みを持たせ、訪問客の興味を引き付けることができる。また、聞き手のニーズによってどちらかの視点を強調したり抑制したりすることもある。

ところで、科学コミュニケーションにおいては、科学者側がある科学事象について一般の人に伝えようと思っても、発信者である科学者の持つ「フレーム」と受信者である一般人の「フレーム」が違うことから本来の正しい意味で伝わらないことがあり、科学コミュニケーションは異文化コミュニケーションに似ているという指摘もある〔塚原ほか編 2022, p. 192-193〕。そうした「異文化」を研究対象としてきた文化人類学では、しばしば「翻訳」の議論が行われてきた。文化人類学者がほかの文化の現実を言語によって表す場合、すべてをそのまま別の言語に移し替えることは原理上不可能であって、文化フィルターを通して何らかの削除・歪曲・一般化が起こる〔河原 2014, p. 8〕。

地球科学という「異文化」を学び、それを科学者ではない一般人として理解できる平易な言葉で構築しなおし、同時に被災者としての主観的視点を持ちながら語る作業は、この「翻訳」の概念に近いのではないかと<sup>24)</sup>。つまり、被災経験や心情、地球科学の学習度、噴火災害から得た教訓という、一人ひとり異なるフィルターを通して科学知を語る。それゆえに、平成噴火災害について多様な語りが存在する。

菅〔2021〕は、「語りの複数性」が担保されるべきであるとする。東日本大震災・原子力災

害伝承館（以下、伝承館）の語り部ボランティアの講話内容について、国や東京電力を含む特定団体への批判を避けるよう、国や県による運営者から要請され、「語りの制限」が起っているが、菅は、逆に東京電力や国の当事者による語りがあってもよいのではないかと指摘している〔菅 2021〕。ここでいう「語りの複数性」とは、単に様々な「語り」が併存しているということではなく、様々な意味内容と主張とを持った、異なる独自の「語り」をいう。もちろん、伝承館の場合は原子力災害という人為災害の側面が強く政治的圧力が生じやすいため、語りの制限が起っている。一方、島原半島では、災害記念館の語り部もそのほかのガイド組織も、マニュアルなどはなく、語りたいことへの制約は小さいため、一変した生活、支援への感謝、学習の必要性など様々な主張の語りを展開され、一定程度の「語りの複数性」が認められる。

ところが、認定ジオガイドは、協議会による認定試験によって地球科学的知識を問われ、旧大野木場小学校被災校舎など一部のジオサイトには、（科学的な内容以外の部分にはある程度の余地があるものの）マニュアルが存在する。つまり、科学的プログラムであるジオパークでの語りには「制限」がもたらされるリスクがつきまとう。前章で紹介したD氏の「叱責された」事例もその一つではないだろうか。世界ジオパーク再認定審査という、権威的で、公的で、「科学的」な要素がより重要な場面においては「語りの制限」が生じかねなかった。叱責した責任ある立場のジオパークガイドの会会長からすれば、D氏の当時の生活の困難さや現在の家族の話は、「科学から外れた」「余計」な話になってしまった。しかし、そのD氏の個人的経験談は、審査員からは好評であった。ジオパークにおけるガイドの語りは、科学的理解を重視した「解説」活動に終始するのではなく、客観的で俯瞰的な科学の語りと主観的な被災者・生活者視点の語りの両方が交錯した「翻訳」的な語りになされることによって、災害について、科学的理解のみならず、多様な現実や規範、感情、教訓を学ぶことが可能になる。

確かに、語る側の解釈が多様であるように、聞き手の解釈も多様であるがゆえに、語り部の語りは災害経験の共有という点において個人レベルからの脱却を妨げられているという指摘もある〔祖田 2015〕。しかし、ガイドや語り部の被災経験を、地球科学的知識と効果的に結びつけてジオストーリーに組み込めば、災害経験が単なる個人レベルの体験談から共有すべき「文化資源」〔Shannon et al. 2011〕になるのではないか。

柚洞ほか〔2014〕は、日本で議論されているジオストーリーは、Stewart and Nield〔2013〕を引き合いに、文化人類学などで述べられているナラティブ（narrative；物語）に近いと指摘している。地域住民と地球科学がコンテクスト（文脈、背景）を共有し、彼らを主体としたナラティブ（物語）が構築されることで、「地球の物語」の一編を語るができることとした〔柚洞ほか 2014, p. 21-22〕。ここでいうナラティブは、地域共通で認識されていることを想定しているかもしれないが、災害についての「翻訳」的な語りは、個人の経験に基づくナラティブである。この個々のナラティブの差異が被災経験の語りの多様性・複数性を生んでいるし、こうした多様性・複数性があることによって、「翻訳」的な語りは災害・被災の実態の多様さ

を伝える重要な資源になりうる。

## VI おわりに

ガイドや語り部は、個人の興味や経験に基づいて学習し、災害観や災害へのまなざしを形成してきた。ガイドや語り部は被災者としての視点と科学的な視点の両方を持つ「翻訳」的な語りを展開し、地球科学的知識を平易な言葉で伝えながらも、自身の被災経験や主張と結びつけることで、聞き手の災害への理解を深める役割を果たすことができる。そうすることで、ガイドや語り部の災害経験は個人レベルから脱却し、地域共有の文化資源となることが示唆された。青木保は、著書『文化の翻訳』の「あとがき」でこのように述べている。

人類学者は一人でフィールドに入り、一人で資料を蒐め、それを持ち帰って、一つの異文化の理解・解釈として提示する。そこには科学的、客観的な検証の枠組を破る何か常在に存在する。フィールドにおける主観と客観の不断の交錯、自文化と異文化の葛藤、誤解と偏見の重圧、そういった複雑な要素が、動き、生き、変転しつつある場において多層的に絡み合うのである。〔青木 1979, p. 198〕

一人で資料を集めそれを理解・解釈する人類学者は、主観と客観の不断の交錯、自文化と異文化の葛藤、誤解と偏見の重圧を感じているというが、島原半島のガイド・語り部は、一人で学習しているわけではない。人類学でいう「異文化」を「地球科学」に置き換えたとき、ガイドや語り部は、被災者・生活者として噴火災害に向き合った主観的なまなざしと地球科学を学び噴火災害を客観的にみたまなざしとの間を往復しつつ、被災者・生活者としての実感と学習した地球科学的知識のギャップを感じつつも、自らの言葉で語ろうとしてきた。各種講座や自主学習会に参加し、ジオパーク専門員や地域内の専門家と交流することで知識や技術を共有し、一定程度不安を払拭することにも成功してきた。

本稿では、ジオパークにおける被災経験の語りを「解説」ではなく「翻訳」と捉えることの可能性を検討してきた。簡易化した科学知を語るだけでなく、個々のガイドの個性や経験を生かした独自性のある語りを科学的なストーリーに組み込むことで、ジオストーリーの魅力を向上させる可能性がある。地球科学的な知識と被災経験のような住民個人の経験の語りが相互に補完し合い、より深い理解を提供するジオストーリーの構築が期待される。

### 付記

本稿は、2014年に大阪市立大学文学部に提出した卒業論文と2016年に東北大学大学院理学研究科へ提出した修士論文の一部を大幅に加筆修正したものである。本研究は、平成26年度島原半島ジオパーク学術研究奨励事業、JSPS 科研費 23JK1847 の助成を受けたものである。

## 注

- 1) 2023年5月24日現在、日本ジオパークは46地域。そのうち10地域がユネスコ世界ジオパークに認定されている(日本ジオパークネットワークホームページ(<https://geopark.jp/> 2023年8月20日アクセス))。
- 2) II、III、IV章の大部分は2013年6月から2015年1月にかけての期間に実施した聞き取り調査及びアンケート調査などに基づいている。ただし、一部(例えば、IV章1節の後半など)は2023年6月の追加調査で聞き取った内容が含まれる。いずれの時期の調査による情報であるかは本文または注で示すようにしたが、特に断りのない場合は前者の期間に得た情報である。
- 3) 2013年の筆者によるガイドや語り部、行政関係者への聞き取り調査の中でしばしば出てきた発言である。
- 4) 「がまだす」とは島原方言で「がんばる」という意味である〔島原地域再生行動計画策定委員会 1997〕。
- 5) この2カ所の災害遺構以外にも、1991年6月3日の大火砕流により多くの犠牲者を出した、「北上木場農業研修所跡」(2003年整備)や「定点」周辺(2021年整備)の整備も進められているが、本調査を実施していた2012~2014年当時は砂防指定地内で立入禁止であり、特別な機会を除きガイドや語り部による案内活動は行われていなかったため本稿では割愛した(現在はツアーが存在する)。北上木場農業研修所跡や定点については杉本〔2021〕や井関〔2023〕が詳しい。また、1993年の火砕流で被災した千本木地区にも被災遺構がみられるが、こちらは保存に向けた取り組みがされたわけではなく基本的には立ち入りが禁止されている。
- 6) そのうち3棟はテント内で保存・展示されている。2021年に、屋外展示されている8棟のうち経年劣化が著しい2棟が解体撤去された。
- 7) 2013年に実施した南島原市への聞き取り調査の際に得た資料による。
- 8) 長崎県や島原市、深江町を中心として、これらの施設をまるごと一つの野外博物館としてとらえた「平成新山フィールドミュージアム構想」が2003年に策定され、災害記念館を拠点として災害遺構などの学習体験施設をネットワーク化して学習・体験を提供するために、ガイドブックの作製・配布、ガイドの養成、案内板の設置などが行われた〔杉本 2021〕。
- 9) 島原半島ジオパーク推進連絡協議会のはちに島原半島ジオパーク協議会と改称しているが、以下では時期を問わず「協議会」と表記する。
- 10) ジオパークでは4年に一度再審査が行われ、体制に不備がある場合は条件付き再認定となり、2年後の再審査対象となる。
- 11) 日本ジオパークネットワークホームページ、お知らせ・プレスリリース「日本ジオパーク再認定審査結果報告 2013年1月28日リリース」(<https://geopark.jp/jgn/news/2013/0128.html> (2023年11月7日アクセス))
- 12) 本稿でいうガイドの「技術」とは、持っている知識のどの部分をどのような順番で提示するか、聞き手の興味関心をひくエピソードなどをどのように盛り込むか、効果的に伝えるために写真や資料をどのように活用するかなど、ガイド案内の技術や語りの技術を指す。
- 13) そのため、火山学習の窓口が2つ(観光連盟とジオパーク協議会事務局)ある状態が続いた〔松木 2015〕。2023年現在は、観光連盟所属のガイドはおらず、火山学習関係についてはすべてジオパークが受け入れることになっている。
- 14) それらの多くは2008年に各旧町の観光協会をまとめる形で南島原ひまわり観光協会が設立されたのを契機に組織されたものである。原城の乱の舞台となった旧南有馬町原城では、2007年に発足した「原城跡観光ガイドの会」が活動している。2008年に南島原ひまわり観光協会が立ち上げられたのを契機に、旧北有馬町に「有馬つんなも会」、旧口之津町に「口之津観光ガイドの会」、旧加津佐町に「加津佐観光ガイドさんとすの会」が設立された。旧有家町では町内の酒などの蔵元5軒を中心に2007年に「ありえ蔵のまち保存会」が設立され、それが発展する形で2014年4月、「有家えびす会」が組織された。これらはすべて「史談会」や「歴史研究会」を前身としている。
- 15) 2023年6月に実施した自主学習会主催者と顧問の災害記念館学芸員への聞き取りによる。
- 16) 協議会事務局への聞き取りによると、再審査ではジオパークガイドが組織化されていることも重視されていたため、組織化を急いだという。

- 17) ここでいう「ジオ」とは、ジオパークで扱うような地質や地理など地球科学に関わる情報のことを想定している。アンケート調査票では紙面の幅の都合により短い語句でこのことを表現する必要があったため、この用語を使用した。
- 18) 2023年6月に協議会事務局においてガイドマニュアルを閲覧した。
- 19) 認定ジオガイドは、協議会事務局の管理のもと運営されていたが、ジオパークガイドらによる自主的な活動を推進するために、「島原半島ユネスコ世界ジオパークガイドの会」(以下、ジオパークガイドの会)が結成された。認定ジオガイドらの中から会長が選出され、協議会事務局の支援を受けながら研修会を開催したり、ガイドマニュアルを作成したりしている(2023年6月の聞き取り調査)。
- 20) 大野木場小学校を襲ったのは、1991年9月15日に発生した火砕流に伴う熱風や火山灰を中心とする火砕サージだった〔長井ほか 2003〕。そのため、大野木場小学校被災校舎におけるジオパークのガイドマニュアルでは火砕流と火砕サージの違いについても触れられている。
- 21) D氏へは、2023年6月にも追加の聞き取り調査を実施した。表7の内容はこの調査の際に聞き取りした内容である。
- 22) ここで述べるD氏の事例も、2023年6月の追加調査によるものである。
- 23) 聞き手に対してわかりやすく伝えるために、ガイドや語り部は、設置されている看板や独自に作成したプリント、自ら採集した石などを用いて案内していることがある。このようなツールの使用、工夫・技術についても語り部の一部として留意が必要な論点の一つであると認識しているが、本稿では紙面の都合により大きく取り扱うことができなかつたため、別稿で改めて議論したい。
- 24) 菊地ほか〔2022〕では、地球科学的知識を観光や教育に活用できるように「翻訳」する者としてジオパーク専門員の存在が指摘されている。一方、本稿で焦点を当てているのは、ガイドや語り部が自身で学んだ地球科学的知識を用いて、被災経験についてガイドをしたり語ったりする際に「翻訳」を行っている点である。もちろん、ガイドや語り部の知識獲得の過程において翻訳がなされていることは(ジオパーク専門員による翻訳も含めて)否定できないが、本稿においては主要な論点ではないため、今後新たな調査を行い別稿で焦点化を図りたい。

#### 参考文献・資料

- 青木保 1798 (2012 新装版)『文化の翻訳』, 東京大学出版
- 井関睦美 2023「災害文化形成における災害遺構の機能」『明治大学人文科学研究紀要』90, pp. 293-322.
- 磯野巧 2015「東京都大島町における自然ガイド活動の地域的展開」『地学雑誌』124(1), pp. 43-63.
- 井出明 2010「復興観光とアートマネジメント」深見聡・井出明編『観光とまちづくり―地域を活かす新しい視点―』, pp. 203-210. 古今書院
- 江越美香・吉田大祐・松尾純白 2009「島原半島ジオパークにおけるガイド養成講座」『月刊地球』31, pp. 455-459.
- 太田一也 1996「雲仙火山の噴火活動を振り返って」『地熱』, 33(4), pp. 285-301.
- 大野希一 2011a「大地の遺産を用いた地域振興」『地学雑誌』120(5), pp. 834-845.
- 大野希一 2011b「ジオツーリズムの実例と課題～島原半島ジオパークの例～」『日本地理学会発表要旨集』2011s, pp. 259.
- 河原清志 2014「翻訳概念の射程―文化の翻訳と喩としての翻訳」『金城大学人文・社会科学研究所紀要』18, pp. 1-14.
- 菊地俊夫・有馬貴之 2011「オーストラリアにおけるジオツーリズムの諸相と地域振興への貢献」『地学雑誌』120(5), pp. 743-760.
- 菊地直樹・山崎由貴子・大谷竜・斉藤清一 2022「ジオパークにおけるガイドの活動実態と意識に関する調査」『ジオパークと地域資源』5(1), pp. 1-17.
- 鬼頭秀一 2016「災害も含めた持続可能な社会の構築に向けて―ジオパークにおける科学と社会の交差」『E-journal GEO』11(1), 329.
- 小泉武栄 2011「ジオエコツーリズムの提唱とジオパークによる地域振興・人材育成」『地学雑誌』120(5), pp. 761-774.

- 坂口豪 2023 「浅間山北麓 ジオパークにおけるジオガイドの組織の活動による地域の自然・文化資源に関する知識共有」『E-journal GEO』18(1), pp. 131-141.
- 澤田結基・武田一夫・川辺百樹・藤山広武 2011 「ジオツアーに求められる工夫—北海道の自然ガイドを対象にした試行的ジオツアーの実施結果からの提案」『地学雑誌』120(5), pp. 853-863.
- 島原地域再生行動計画策定委員会 1997 『島原地域再生行動計画』
- 島原半島ジオパーク推進連絡協議会 2009 『世界ジオパークネットワーク加盟申請書』
- 菅豊 2021 「災禍のパブリック・ヒストリーの災禍」標葉隆馬編『災禍をめぐる「記憶」と「語り」』, pp. 113-152, ナカニシヤ出版.
- 杉本伸一・長井大輔 2009 「雲仙火山 1991 年 6 月 3 日の火砕流による人的被害」『九州大学大学院理学研究院研究報告. 地球惑星科学』, 22(3), pp. 9-22.
- 杉本伸一 2012 「災害復興から地域振興へ」高橋和雄編『東日本大震災の復興へ向けて—火山災害から復興した島原からのメッセージ』, pp. 165-185. 古今書院
- 杉本伸一 2021 「災害遺構の保存・活用と島原半島ジオパークでの防災のとりくみ」『自然災害科学』40(3), pp. 312-317.
- 鈴木晃志郎 2014 「ダークツーリズムの視角からみたジオパーク、ジオツーリズムの可能性」『E-journal GEO』9(1), pp. 73-83.
- 祖田亮次・目代邦康 2013 「了解可能な物語を作る—河川災害と付き合うために」, 市川昌弘・祖田亮次・内藤大輔編『ボルネオの〈里〉の環境学—変貌する熱帯林と先住民の知』, pp. 55-93. 昭和堂
- 祖田亮次 2015 「人文地理学における災害研究の動向」『地理学論集』90(2), pp. 16-31.
- 第 5 回ジオパーク国際ユネスコ会議 2012 『第 5 回ジオパーク国際ユネスコ会議 報告書』
- 高原耕平・正井佐知・林田怜菜 2023 「災厄のミュージアムにおける「対話」の理念—災厄の表現の「有意義な不安定化」をめざして—」『日本災害復興学会論文集』21, pp. 31-41.
- 玉脇健太 2017 「山陰海岸ジオパークの実際とガイド活動の展開—兵庫豊岡市に着目して—」『兵庫教育大学地理学研究室研究報告』22, pp. 20-26.
- 塚原東吾・綾部広則・藤垣裕子・柿原泰・多久和理実編著 2022 『よくわかる現代科学技術史・STS』, ミネルヴァ書房
- 長井大輔・遠藤邦彦・宮地直道 2003 「溶岩円頂丘崩落型火砕流に伴う火砕サージの分布特性とその発生機構—雲仙普賢岳 1991 年 9 月 15 日火砕流を中心に—」『日本地質学会学術大会講演要旨』2003, pp. 277.
- 長井大輔・東山陽次・柵山徹也 2022 「長崎県島原半島南部口之津地域に分布する玄武岩の年代と岩石学的特徴」『日本地球惑星科学連合 2022 年大会講演情報』SVC29-P07.
- 長井大輔・松島健・清水洋・杉本伸一・寺井邦久 2010 「雲仙火山を活用した火山・防災教育とジオパーク」『日本火山学会講演予稿集』2010, pp. 137.
- 長崎県雲仙岳災害復興室がまだす計画推進班 1997 「水清く 緑あふれ 人つどいにぎわう島原半島に」『消防防災の科学』, 049, pp. 15-20.
- 長崎県島原振興局 2022 『島原半島要覧 2022』
- 中田節也 2013 「自然の脅威：ジオパークで災害を語る」山陰海岸ジオパーク国際学術会議「城崎会議」実行委員会『山陰海岸ジオパーク国際学術会議「城崎会議」要旨集』, pp. 11-12.
- 東山陽次・長井大輔・柵山徹也・森康 2022 「島原半島南部に分布する中新世玄武岩類の地質と岩石」『日本火山学会講演予稿集』2022, pp. 124.
- フंक, カロリン 2008 「学ぶ観光」と地域における知識創造『地理科学』63(3), pp. 160-173.
- 松木駿也 2015 「長崎県島原半島における観光ガイドの再編と課題」『日本地理学会発表要旨集』2015s, pp. 192.
- 柚洞一央・新名阿津子・梶原宏之・目代邦康 2014 「ジオパーク活動における地理学的視点の役割」『E-journal GEO』9(1), pp. 13-25.
- 横山秀司編 2014 『ジオツーリズム論—大地の遺産を訪ねる新しい観光』, 古今書院
- Gaillard, J. C. and Mercer, J. 2013. From knowledge to action: Bridging gaps in disaster risk reduction. *Progress in Human Geography*, 37(1), pp. 93-114.

- Gamble, D. W., Campbell, D., Allen T. L., Barker, D., Curtis, S., McGregor, D. and Popke, J. 2010. Climate change, drought, and Jamaican agriculture: local knowledge and the climate record. *Annals of Association of American Geographers*, 100, pp. 880-893.
- Nishitani, K., Nakagawa, K. and Nagamatsu, S. 2021. Geotourism and Disaster Storytelling: Lessons from 2013 Izu-Oshima Island Debris Flow Disaster. *Journal of Disaster Research*, 16(2), pp. 170-175.
- Shannon, R. Hope, M. and McCloskey, J. 2011. The Bengkulu premonition: cultural pluralism and hybridity in disaster risk reduction. *Area*, 43, pp. 449-455.
- Stewart, I. S. and Nield, T. 2013. Earth stories: Context and narrative in the communication of popular geoscience. *Proceeding of the Geologists Association*, 124, pp. 699-712.
- Oliver-Smith, A. 2002. Theorizing disasters: nature, power, and culture. In Hoffman, S. M. and Oliver-Smith, A. *Catastrophe and Culture: the anthropology of disaster*. School of American Research Press and James Currey, Santa Fe and Oxford, 23-48. (オリヴァー＝スミス, A. (若林佳史訳) 2006 「災害の理論的考察—自然、力、文化」, ホフマン, S. M.・オリヴァー＝スミス, A. 編 (若林佳史訳) 『災害の人類学—カタストロフィと文化』 明石書店, pp. 29-55.)
- Wisner, B. G., Blaikie, P. M., Terry, C. and Ian, D. 2004. *At risk: natural hazards, people's vulnerability, and disasters*. 2nd ed. Routledge, London. (岡田憲夫監訳 2010 『防災学原論』, 築地書店)

## The Narratives and Scientific Knowledge in Disaster-affected Area: Trends of Guides in the Unzen Volcanic Area UNESCO Global Geopark

MATSUKI Shunya

This paper discusses the relation between disaster experience narratives and geoscientific hazard explanations, using the Unzen Volcanic Area UNESCO Global Geopark as a case. In the area affected by the eruption of Mt. Unzen, there are some facilities for learning about volcanic hazard and disaster, where many guides and storytellers share their personal experiences of the disaster. They are learning geoscientific knowledge not only through provided opportunities, but also through voluntary opportunities to participate in geopark activities. They have developed their own view of disasters through their guiding activities, based on their personal experiences and beliefs while studying earth sciences. In other words, they have developed their narratives as 'translators' with both a subjective perspective as disaster experiencers and a scientific perspective as interpreters. Their narratives can therefore be diverse and complex. The development of 'translation' narratives enables listeners not only to gain a scientific understanding of hazards, but also to learn about different realities, norms and lessons on disasters. Through such interactions, the disaster experiences of storytellers can go beyond individual-level stories and become a broader 'cultural resource' that can be utilized for future disaster prevention and mitigation.

Keywords: geostory, knowledge creation, translation, narrative, geopark guide, Shimabara Peninsula